バリ・ヒンドゥー教のサンスクリット儀軌 *Vedaparikrama*（*Wedaparikrama*）

―儀軌の概要および部分訳（2）

山　口　しのぶ

1．はじめに

インドネシア、バリ島に広まるバリ・ヒンドゥー教の儀礼においては、しばしばサンスクリットで記された儀軌が使用されるが[1]、そのような儀軌のうち、*Vedaparikrama*[2]（略号VP, 現地では*Wedaparikrama*と表記されることが多い）はバリ・ヒンドゥー教において、聖水の制作と儀礼での使用、およびシヴァ神をはじめとする神々への礼拝を述べた儀軌である。

1933年Sylvain Léviにより出版された*Sanskrit Texts from Bāli*（G.O.S. No. 67）には、Léviがバリ島で写本を入手した複数の儀軌類や讃歌（stotra）が収められているが、その中にVPも含まれている。またVPではシヴァ神への讃歌を中心としたサンスクリットのマントラと、バリ語での諸手順の説明が述べられている。

インドネシア人研究者G. Pujaも、VPのテキスト校訂およびインドネシア語訳と解説を行っている[3]。筆者は山口 2021において本儀軌の部分

---

[1] 筆者は、本発表で取り上げた*Vedaparikrama*を使用した通過儀礼の一種Bayuh Otonについて調査研究を行った。これについては山口 2020参照.

[2] バリ・ヒンドゥー教において*Veda-*（*Weda-*）と名付けられたテキストは、インドのヴェーダ文献を意味するのではなく「儀礼や神秘的な文字からなる宗教文献の集成」を指す。また*'parikrama'*はサンスクリットで「歩き回ること（roaming about）」「連続、ひと続き（series, succession）」を意味するが、この語に関しLévi（1933：XVIII）は元来「礼拝（worship）」を意味する*'parikarman'*がバリで変化したものと述べており、Gonda（1973：189-190）もこの意見を支持している.

訳を行ったが、本稿においては、その続きの箇所を和訳した。以下にVPの次第について述べよう。

2．VPの次第

VPの構成は以下のとおりである。以下の構成はLévi 1933、Puja 2007を参照しつつ作成した。両者のVPテキストを比較すると、Pujaの校訂本のほうがLévi本より分量が多く、前者は後者にない歯磨きや沐浴といった最初の準備的行為も含んでいるが、Lévi本はPuja本に無いマントラも含んでいる。このようにVPには構成のやや異なるいくつかのバージョンがあると思われる。筆者は山口 2021, 129-130においても次第を示したが、その際Puja本にしたがった。しかしながら、Puja本には「*Surya Sevana*にしたがった聖水作り」などの付加的と思われる部分があったことから、本稿においてはその箇所を削除し、Lévi本を基本にPuja本および本儀軌と非常に類似した構成を持つと考えられるHooykaas 1966[4]も参照しながら、再度下記の次第にまとめた。

＜*Vedaparikrama*の次第＞

1. 浄化の次第
- 1.1 供養の準備
- 1.2 儀礼用の衣服および装飾品の着用

2. 供物と身体の浄化
- 2.1 供物の浄化
- 2.2 身体の浄化

3. 儀礼用の聖水の準備
- 3.1 聖水を置く場所の準備
- 3.2 聖水の容器の聖別
- 3.3 閼伽水の浄化

---

[3] Puja 2007

[4] Hooykaas 1966では儀軌名称は*Sūryasevana*である.

3.4　聖水の制作
3.5「三つのマンダラ」(*trimaṇḍala*) の布置
3.6「三つの本質」(*tritattva*) の布置

4.　調息

5.　僧の身体をシヴァ神にすること (*śivīkaraṇa*)

5.1　シヴァ・アートマンを身体の外に解き放つこと (*ngīlī ātmā*)
5.2　僧の身体の穢れを焼き払うこと (*dagdhīkaraṇa*)
5.3　[身体内部の]秘密の火を消すこと (*padem*)
5.4　甘露を作り出すこと (*amṛtīkaraṇa*)
5.5　ブラフマー神、シヴァ神の身体の部分としての手の浄化 (*brahmāṅga-karaśodhana, śivāṅga-karaśodhana*)
5.6　シヴァ・アートマンを元の場所に戻すこと、および布置の行為

6.　シヴァ神の確立と賞讃

6.1　シヴァ神の確立
6.2　鈴による賞讃
6.3　ガンガー (ガンジス河) とシヴァ神への賞讃

7.　灰を身につけること、およびシヴァ神の瞑想と供養

7.1　灰を身に付けること
7.2　シヴァ神の瞑想と供養
7.3　結びの供養

以上の次第のうち、山口 2021においては「1. 浄化の次第」から「4. 調息」の概説および和訳を行った。本稿では、その続きである「5. 僧の身体をシヴァ神にすること (*śivīkaraṇa*)」からの和訳を示す。

3．VP *5, 6,* 7 の次第について

VPの次第のうち「5. 僧の身体をシヴァ神にすること」は、単なる水の浄化や神々への供養のみならず、瞑想の要素も取り入れた、本儀軌の特徴を表す部分である。

*Śivīkaraṇa*は、文字通りには「シヴァを作り出すこと」であるが、この行為はさらに、5.1 シヴァ・アートマンを僧の身体の外に解き放つこと、5.2 僧の身体の穢れを焼き払うこと 、5.3［身体内部の］秘密の火[5]を消すこと、5.4 甘露を作り出すこと、5.5 ブラフマー神、シヴァ神の身体の部分としての手の浄化、5.6 シヴァ・アートマンを元の場所に戻すこと、および布置の行為、の 6 つの部分からなる。

5.1においては、僧はシヴァ神に敬礼し、自らの心臓にあるアートマンを「シヴァの門」(*śivadvāra*, 頭頂) から身体の外に導く[6]。5.2ではアートマンを僧侶の身体から外に導いた後、身体をホーマの火炉、内管を段木とする文言[7]が唱えられる。この行為は、僧が瞑想において身体内部の穢れを火で焼き、身体内部を浄化する行為であると考えられる。続く5.3の次第では、まず僧はバリで太陽神*Āditya*と同一視されるパラマシヴァに対する敬礼文を唱え、さらにシヴァ、サダーシヴァ、パラマシヴァに対してマントラを唱える。これらのマントラは、体内にまだ残っていると考えられる、瞑想で作り出した火を消す目的があると考えられる。

その後5.4の次第では、僧はマントラを唱え虚空に存在するシヴァ神からの甘露（*amṛta*）がほら貝から流れ出し、喉を通って僧の体内に流れ込むのを瞑想する[8]。ここではシヴァ神の本質としての甘露が僧の体内に入りこみ、実質的に僧がシヴァ神と一体化することを示すと考えられる。5.5では、僧の身体にシヴァ神の真髄である甘露を入れた後、手の浄化が行われる[9]。ここで唱えられるマントラは身体各部への種子の布置も意味する。

次の5.6では僧はシヴァに敬礼し、シヴァを象徴する*iṃ*、*taṃ*などの種子を身体各部に布置する。次に僧は心臓に蓮華を瞑想し、「シヴァのアートマンの住処（*sthiti*）である心臓に敬礼する」と唱え、5.1で身体

---

[5] Puja 2007, 130. Cf. Lévi 1933, 13, No. 49

[6] Puja 2007, 126参照。

[7] śarīraṃ kuṇḍam ity uktam antaḥkaraṇam indhanam/saptauṃkāramayo bahnir bhojanan ta udindhitam// Lévi 1933, 13.

[8] Puja 2007, 132およびLévi 1933, 14参照。

[9] Puja 2007：135およびLévi 1933：9, 14は、右手の浄化を*Brahmāṅga-Karaśodhana*、左手の浄化を*Śivāṅga-Karaśodhana*と呼んでいる。

の外に出したアートマンを再び僧の心臓に戻す[10]。その後僧はマントラを唱え、シヴァ神が坐すための蛇神アナンタの台座を聖水の上に作り出す。次にその台座の四隅に「四つの超自然力（*caturaiśvarya*）」を配置する。その後僧は心臓の八葉蓮華の上に、サンスクリットの母音、子音、半母音、９名のシャクティ（*navaśakti*）の種子、九曜、リシ、祖霊などの種子を次々と布置し、ここでは八葉蓮華はあらゆる種子が描かれたヤントラ、もしくはマンダラの様相を呈す。その後掌に水をとり神々に供える行為（*udakāñjali*）およびシヴァ神への供養がなされ、５の次第は終了する。

「6. シヴァ神の確立」は、主としておよびシヴァ神とガンガー女神への賞讃からなる。また最後の次第である「7. 灰を身につけること、およびシヴァ神の瞑想と供養」では、シヴァとなった僧侶が身体に灰を付け、再びシヴァ神の瞑想と僧侶と神の一体化が図られる。その後結びの供養が行われ、本儀軌が終了する。次節では以上に述べた次第５，６，７の和訳を示した。

３．VP和訳

以下は前掲のVPの次第のうち、「5. 僧の身体をシヴァ神にすること（*śivīkaraṇa*）」から「7. 灰と装飾品を身につけること、およびシヴァ神の瞑想と供養」までの和訳である。和訳に際しては、(Lévi 1933)（Puja 2007）のVPのテキスト、およびVPとパラレルな箇所を多く含むHooykaas 1966を参照した。VP１～４の次第の和訳については、山口2021を参照されたい。

---

[10] ここでのこの行為は Lévi 1933, 15の記述に基づく。Puja 2007, 166では、八葉蓮華に母音、子音、祖霊など全ての種子を布置した後にアートマンを心臓に戻す行為がある。

＜*Vedaparikrama*和訳＞

5．僧の身体をシヴァ神にすること（*śivīkaraṇa*）

5.1　アートマンを僧の身体の外に解き放つこと（*ngīlī ātmā*）

オーム、アン、シヴァの本質を持つ者に礼拝する[11]。

5.2　僧侶の身体の穢れを焼き払うこと（*dagdhīkaraṇa*）

5.2.1　*dagdhīkaraṇa*のマントラ

身体は［ホーマの］火炉であり内官はホーマの段木である、と言われる。

７つのオーム字でできた火[12]は、食物のように燃やされる。

5.2.2　カーラ・アグニ・ルドラへの礼拝

オーム、アン、カーラ・アグニ・ルドラに礼拝する。

オーム、ラハ、パト、武器に敬礼する。

オーム、ラハ、ウム、パト、武器に敬礼する。

5.3　［身体内部の］秘密の火を消すこと[13]（秘密の火炉（身体各部）に水を振りかけること, *padem*）

オーム、アン、シヴァの甘露に礼拝する。

オーム、アン、サダーシヴァの甘露に礼拝する。

オーム、アン、パラマシヴァの甘露に礼拝する。

オーム、アン、忍耐を満たす者に礼拝する。

5.4　甘露を作り出すこと（*amṛtīkaraṇa*）

オーム字は最高の智であり、下向きに甘露を降らせる。

---

[11] Puja 2007, 126には「オーム、ハーン、心臓に礼拝する」（*oṃ hāṃ hṛdayāya namaḥ*）がある。

[12] Puja 2007, 126にはこの後「7つのオーム字のマントラ」として、ブラフマー、イーシュヴァラ、ヴィシュヌ、マハーデーヴァなど七神への敬礼文が挙げられている。

[13] Puja 2007, 131によれば、結びとして甘露水を3回振りかける行為の際のマントラである。ここでは3回の甘露水はそれぞれシヴァから恩恵、好意、報いを受けることを意味する。

水晶の色をしたほら貝を、喉の奥に布置せよ[14]。

［そのほら貝から］甘露は雨のように、全ての身体の部分や関節に降りそそぐ。

そこから家長の家庭生活が生まれる、と言われる。

アグニ（火）はプラクリティ（原質）であり、ヴァーユ（風）はプルシャ（霊我）であると知られるべきである。

両者の結合が生命であり、死とは離れている。

オーム、フラン、フリン、サハ、パラマシヴァの甘露に礼拝する。オーム、フラン、フリン、サハ、パラマシヴァ=アーディティヤ、光の身体を持つ者に礼拝する。

5.5　ブラフマー神、シヴァ神の身体の部分としての手の浄化

5.5.1　右手のマントラ

オーム、イン、礼拝する（親指）。オーム、タン、礼拝する（人差し指）。オーム、アン、礼拝する（中指）。オーム、バン、礼拝する（薬指）。オーム、サン、礼拝する（小指）。

5.5.2　左手のマントラ

オーム、ハン、心臓に敬礼する（心臓の印）。オーム、ラン、頭頂に敬礼する（三叉戟の印）。オーム、ブール、ブヴァハ、スヴァハ、スヴァレー（ブヨーマ印）、輝かしい頭部に敬礼する（頭部の印）。オーム、フルーム、鎧に敬礼する（鎧の印）。オーム、バン、眼に敬礼する（vṛṣada印）。オーム、バン、眼に敬礼する（チャクラ印）。オーム、ウン、ラハ、パト、武器に敬礼する（武器の印）。

5.6　シヴァ・アートマンを元の場所に戻すこと、および布置の行為

5.6.1　指にシヴァ神を布置すること

オーム、イン、イーシャーナに敬礼する（親指のサーダナ）。

オーム、タム、タトプルシャに敬礼する（薬指）。

---

[14] Lévi 1933, 14では*dasadasat*となっているが、ここではPuja 2007, 132の*saṃnyaset*をとる。

オーム、アン、アゴーラに敬礼する（小指）。
オーム、バン、ヴァーマ・デーヴァに敬礼する（人差し指）。
オーム、サム、サーディヤ（成就されるべきもの、瞑想されるべきもの）に敬礼する（中指）。

5.6.2　3つの本質（*tritattva*）の布置
オーム、オーム、シヴァを本質とする者に礼拝する。
オーム、オーム、知（*vidyā*）を本質とする者に礼拝する。
オーム、オーム、アートマンを本質とする者に礼拝する。

5.6.3　シヴァ・アンガニヤーサ[15]
（右手のマントラ）オーム、イン、礼拝する（親指）。オーム、タン、礼拝する（人差し指）。オーム、アン、礼拝する（中指）。オーム、バン、礼拝する（薬指）。オーム、サン、礼拝する（小指）。
（左手のマントラ）オーム、ハン、心臓に、礼拝する（親指）。　オーム、リン、身体と頭に、礼拝する（人差し指）。オーム、ブール、ブヴァハ、スヴァハ、燃えさかる髪に礼拝する　（中指）。オーム、フルン、鎧に、礼拝する（薬指）。オーム、バン、眼に礼拝する（小指）。
オーム、ウン、ラハ、パト、武器に礼拝する（武器のマントラ）。

5.6.4　［僧の心臓の］蓮華の上に蓮華の花心をその周囲とともに置くこと
サ、バ、タ、ア、イ、アン、ウム、マン、オーム、オーム。

5.6.5　アートマンを元々の場所（心臓）に戻すこと[16]
オーム、アン、アハ、シヴァのアートマンの住処（*sthiti*）である心臓に敬礼する。オーム、アン、心臓に敬礼する。

---

[15] 山口 2021, 120の「2.2.1 手の浄化」の箇所と同様のマントラである。
[16] puja 2007では、この行為はこの場所ではなく、後の箇所（本テキストの「6.1.2 すべての供物（塗香、生米、花、線香、灯明）による供養（sankepi）」の後に述べられる。

5.6.6　水上にアナンタ蛇の座を作り出すこと

オーム、アナンタ蛇を座とするものに敬礼する。

5.6.7　四種の超自然力（*caturaiśvarya*）のアナンタの座への布置

オーム、フラン、正義なる者、獅子の姿をした者、白色の者に敬礼する、スヴァーハー。南東に。オーム、リン、知識なる者、獅子の姿をした者、赤色の者に敬礼する、スヴァーハー。南西に。オーム、トゥヌルン、執着を離れた者、獅子の姿をした者、黄色の者に敬礼する、スヴァーハー。北西に。オーム、トゥヌルン、超自然力（*aiśvarya*）、獅子の姿をした者、黒色の者に敬礼する、スヴァーハー。北東に。オーム、オーム、蓮華座に敬礼する、スヴァーハー。

5.6.8　心臓の八葉蓮華への種子の布置

5.6.8.1　八葉蓮華への母音の布置

オーム、アン、アーン、敬礼する（東）。オーム、イン、イーン、敬礼する（南東）。オーム、ウン、ウーン、敬礼する（南）。オーム、リン（*ṛṃ*）、リーン、敬礼する（南西）。オーム、リン、リーン、敬礼する（西）。オーム、エーン、アイン、敬礼する（北西）。オーム、オーム、オーム、敬礼する（北）。オーム、アン、アハ、敬礼する（北東）。

5.6.8.2　子音の布置

オーム、カン（*kaṃ*）、カン（*khaṃ*）、ガン、敬礼する（東）。オーム、ガン、ナン、チャン、敬礼する（南東）。オーム、チャン、ジャン、ジャン、敬礼する（南）。オーム、ガン、タン、タン、敬礼する（南西）。オーム、ダン、ダン、ナン、敬礼する（西）。オーム、タン、タン、ダン、敬礼する（北西）。オーム、ダン、ナン、パン、敬礼する（北）。オーム、パン、バン、バン、敬礼する（北東）。

5.6.8.3　半母音（ya, ra, la, va）およびs音の布置

オーム、マン、敬礼する（東）。オーム、ヤン、敬礼する（南東）。オーム、ラン（raṃ）、敬礼する（南）。オーム、ラン（lam）、敬礼する（南西）。オーム、ヴァン、敬礼する（西）。オーム、シャン（śaṃ）、敬礼

する（北西）。オーム、シャン（ṣaṃ）、敬礼する（北）。オーム、サン、敬礼する（北東）。オーム、アハ（中央）。

5.6.8.4　蓮華の根元への 9 名のシャクティの布置

オーム、ラン（raṃ）、ディープターに敬礼する（東）。オーム、リン、スークシュマーに敬礼する（南東）。オーム、リン、ジャヤーに敬礼する（南）。オーム、ルーン、バドラーに敬礼する（南西）。オーム、ラン、ヴィマラーに敬礼する（西）。オーム、ライン、ヴィブーティーに敬礼する（北西）。オーム、ローン、アモーガーに敬礼する（北）。オーム、ラウン（rauṃ）、ヴィドゥユターに敬礼する（北東）。オーム、ラン、サルヴァトームキニー（一切の方角に顔を向けた女神）に敬礼する（中央）。

5.6.8.5　ブラフマーンガ・シラ・ニヤーサ

オーム、アン、カン、カソールカ、イーシャーナに敬礼する（中央）。
オーム、アン、カン、カソールカ、タトプルシャに敬礼する（東）。
オーム、アン、カン、カソールカ、アゴーラに敬礼する（南）。
オーム、アン、カン、カソールカ、ヴァーマデーヴァに敬礼する（西）。
オーム、アン、カン、カソールカ、サーディヤに敬礼する（北）。

5.6.8.6　シヴァ・アンガ・ニヤーサ

「5.6.3 シヴァ・アンガ・ニヤーサ」と同様のマントラ

5.6.8.7　祖霊などの布置[17]

オーム、一切の神々に敬礼する（ヴァジュラ・ムドラー）。オーム、アン、七名のリシに敬礼するスヴァーハー（ダンダ・ムドラー）。オーム、アン、祖霊たちに敬礼する（チャクラ・ムドラー）。オーム、アン、サラスヴァティーに敬礼する（パーシャ・ムドラー）。

---

[17] このマントラはLevi 1933には記されておらず、「祖霊などの布置にしたがう」とだけ述べられている。ここでの文言はPuja 2007：155を参照した。

5.6.8.8　4つのサンディヤーの布置

オーム、アン、シュクリーに敬礼する（東）。オーム、アン、バクティーに敬礼する（南）。オーム、アン、クリシュナーに敬礼する（北）。オーム、アン、ジャムビカーに敬礼する（西）。

オーム、シヴァの胎である心臓に敬礼する。

5.6.8.9　月など九曜の指への布置

オーム、サン、ソーマ（月）に敬礼する（東）。オーム、ブン、ブダ（水曜）に敬礼する（南）。オーム、ブリン、ブリハスパティ（木曜）に敬礼する（西）。オーム、バン、ヴァールガヴァ（金曜）に敬礼する（北）。オーム、ラン、ラーフ（食）に敬礼する（北西）。オーム、カン、ケートゥ（彗星）に敬礼する（北東）。オーム、アンガーラ（火曜）に敬礼する（南東）。オーム、シャン、シャニシュチャラ（土曜）に敬礼する（南西）。

5.6.8.10　三字のマントラ（*tryakṣaramantra*）

オーム、マン、敬礼する。オーム、ウン、敬礼する。オーム、アン、敬礼する。

5.6.8.11　吉祥なるトリ・サマヤの布置[18]（*śrītrisamayanyāsa*）

オーム、ウン、ヴィシュヌに敬礼する。オーム、マン、イーシュヴァラ（シヴァ）に敬礼する。オーム、アン、ブラフマーに敬礼する。

5.6.8.12　最高のマントラの布置（*kūṭamantranyāsa*）

オーム、フラン、フリン、サハ、パラマシヴァ=アーディティヤに敬礼する。

5.6.9　掌の水による供養（*udakāñjali*）

オーム、ハン、カン、カソールカに敬礼する。オーム、グリン、忍耐に長けた者（*kṣamākaraṇa*）に敬礼する。

---

[18] Hooykaas 1966, 80ではこの箇所に「神の安立のマントラ」（*devapratiṣṭhāmantra*）がある。

5.6.10　シヴァ神の供養

5.6.10.1　膝を洗う水（*aturana pang*）、洗足水、口漱水を供えること

オーム、パン、洗足水に敬礼する。オーム、アン、二種の供え水に敬礼する。オーム、ジャン、清浄なジーヴァに敬礼する。オーム、チャン、口漱水に敬礼する。オーム、グリン、シヴァ神の首に敬礼する。

5.6.10.2　すべての供物（塗香、生米、花、線香、灯明）による供養（*sankepi*）

塗香［のマントラ］。オーム、栄えあるガンデーシュヴァリー、甘露に敬礼する、スヴァーハー。生米［のマントラ］。オーム、クン、クマーラビージャに敬礼する。花［のマントラ］。オーム、プシュパダンタに敬礼する。線香［のマントラ］。オーム、火の炎よ、スヴァーハー。オーム、私は線香を捧げる、スヴァーハー。灯明［のマントラ］。オーム、太陽の光よ、スヴァーハー。オーム、私は灯明を捧げる、スヴァーハー。

適切なムドラー［を結ぶ］[19]。

6　シヴァ神の確立と賞讃

6.1　シヴァ神の確立

6.1.1　容器の水中に*alang-alang*草でオーム字を描く。

オーム字の秘密よ。

6.1.2　生起のマントラ（*utpattimantra*）

イ、バ、サ、タ、ア、オーム、ヤ、ナ、マ、シ、ヴァ、オーム、マン、ウン、アン。

6.1.3　維持のマントラ（*sthitimantra*）

オーム、サ、バ、タ、ア、イ、オーム、ナ、マ、シ、ヴァ―、ヤ、オーム、アン、ウン、マン、敬礼する。

---

[19] Lévi 1933：19では*mudrāḥ/śakavenaṃ*となっているが、Hooykaas 1965：14の説明にしたがって上記の通り和訳した。Puja（2007：164）はこの箇所で、Īśvara, Maheśvaraなどの男神とDevī, Lakṣmīなどその妃を示すムドラーを述べている。

6.1.4　シヴァ神の安立[20]（*devapratiṣṭhā*）

オーム、オーム、神の安立に敬礼する。

6.1.5　最高のマントラ

オーム、フラン、フリン、サハ、パラマシヴァ＝アーディティヤに敬礼する。

6.1.6　すべての供物による供養（*sankepi*）

5.6.10.2と同様

6.1.7　聖水を振りかけること

オーム、ムジュン、サハ、ヴァシャト。完成せるシヴァに敬礼する。スヴァーハー。オーム、フリン、鎧に敬礼する。

6.1.8　ガンガー女神の甘露のムドラー・サーダナ（*gaṅgādevī-amṛtamudrā-sādhana*）

オーム。ガンガー女神よ。徳高き者よ、ガンガーの水と地は、

ガンガーの波から成る者よ、ガンガー女神よ、あなたに敬礼する。（甘露印）

オーム、栄えある偉大なガンガー女神よ。微細な甘露を生き物に与える者よ。

オーム字は、美しい甘露の足元に世界を置く。

オーム、[ガンガーは]美しい生起をもたらすものであり、あなた（ガンガー）の生起は輝かしい。

生起は全ての者にとって有益であり、水の生起は栄光を運ぶものである。

6.2　鈴による賞讃

6.2.1　鈴を鳴らして賞讃すること

---

[20] Hooykaas 1966, 84およびPuja 2007, 171では、生起のマントラと維持のマントラの間に神の安立がある。

オーム字はサダーシヴァであり、世界の主であり、慈悲深い。
うやうやしく敬礼すべきである。鈴の音は光り輝く。
鈴の音は最上のものであり、[それは]オーム字であると言われる。
月（チャンドラ）と音（ナーダ）と滴（ビンドゥ）を示す火花、それがシヴァ、あなたである。
オーム。なされない、もしくはなされる諸行為において鈴は長きにわたり、神[のごとく]崇敬されるべきである。取り囲むもの、得たものの集積である恩恵は、疑いなく成就する。
オーム、カン、カソールカに敬礼する[21]。

6.2.2　すべての供物による供養

次に線香、米などすべての供物[を捧げる]。武器のマントラ[を唱える]。

6.3　ガンガーとシヴァ神への賞讃

6.3.1　神に許しを求めること

オーム、偉大な神、一切の生きものに利益をもたらすものよ。私を許してください。
サダーシヴァよ、私を一切の罪からお守りください。
私は罪そのものであり、罪深き行為であり、私は罪を本質とし、罪から生まれた。
一切の罪から私を守ってください。誰からも私をお守りください。
身体に関わる罪が許されますよう、言葉に関わる罪が許されますよう
心に関わる罪が許されますよう、それに満足されますよう、私をお許しください。
劣った種子、劣った詩節、劣ったマントラ、そして同様に
劣った信愛（バクティ）、劣った成長[を持つ私を]、サダーシヴァよ、私はあなたに敬礼する。
オーム、マヘ―シュヴァラよ、マントラが不十分な、行いが不十分な、そして親愛の不十分な[私によって]礼拝された、マハーデーヴァよ、私

[21] Puja 2007, 176では、これは*upahṛdayamantra*と呼ばれている。

に満足されよ。

6.3.2　水の中の神[22]（*apsudeva*）への供養

オーム、水の中の神よ。清浄なガンガー女神よ、私はあなたに敬礼する。
一切の苦しみを滅する[あなたは]、水によって浄められる。
一切の苦しみを滅する者よ、一切の病気から解放する者よ、
一切の苦しみの滅において、一切の享受を得るだろう。

6.3.3　5つの音節（*pañcākṣara*）の賞讃偈

オーム、5つの音は偉大な聖水であり、清浄であり、罪を浄化する。
世間の存在物の海の中にあって、何億もの罪に効く薬のようだ。

6.3.4　容器の水を右回りに3回かき混ぜること

オーム、ブール、ブヴァハ、スヴァハ、スヴァーハー。偉大なガンガー女神に、清浄なる聖水に、スヴァーハー。

6.3.5　全ての供物による供養（*sankepi*）　5.6.10.2と同様

6.3.6　水による聖化（*ngaskara veu*）[23]

オーム、フラン、フリン、サハ、クシュマン、アン、ウン、マン、オーム、幸福よ（*svasti*）、幸福よ、クシン、クシュリン、ヤヴァシマナ、イ、バ、サ、タ、ア、満足よ（*bhūti*）、満足よ、ブール、フヴァハ、スヴァーハー、敬礼する。

オーム、アン、イン、ウン、ヴョーン、マン、ヴヤン、ピン、ネン、オーム、オーム、イ、カ、マ、マ、ラ、イヤ、ヴァ、ヤ、ウン、敬礼する、敬礼する、スヴァーハー。

6.3.7　最上のマントラ

---

[22] ここではガンガー女神と考えられる。

[23] Puja 2007, 183およびHooykaas1966, 90ではこの次に「神の安立」（*devapratiṣṭhā*）があるが、両者の記述によると、ここでのシヴァはArdhanārīśvaraの姿をとる.

オーム、フラン、フリン、サハ、パラマシヴァに敬礼する。

6.3.8　7つの聖河（*saṇtatīrtha*）への敬礼（ガンガー女神を導くこと）

オーム、アン、ガンガー（ガンジス河）に敬礼する。オーム、アン、サラスヴァティー河に敬礼する。オーム、アン、シンドゥ河に敬礼する。オーム、ヴィパーシャ河に敬礼する。オーム、アン、カウシキー河に敬礼する。オーム、アン、ヤムナー河に敬礼する。オーム、アン、シャラユー河に敬礼する。

6.3.9　9つの聖河（*navatīrtha*）への敬礼

オーム、クシャン、ナルマダー河に敬礼する。オーム、クシャン、ガンガーに敬礼する。オーム、クシャン、シャラユ―河に敬礼する。オーム、クシャン、アイラーヴァティー河に敬礼する。オーム、クシャン、ナンディシュレイシュター河に敬礼する。オーム、クシャン、ナンディシーター河に敬礼する。オーム、クシャン、ガルボーダー河に敬礼する。オーム、フラン、フリン、サハ、パラマシヴァ＝アーディティヤに敬礼する。

6.3.10　7つのオーム字の配置

オーム、オーム。空を本質とするパラマシヴァに敬礼する。

オーム、オーム。部分を持たない（完全な）サダーシヴァに敬礼する。

オーム、オーム。超越的な本質を持つサダールドラに敬礼する。

オーム、オーム。無我（*nirātman*）を本質とするマハーデーヴァに敬礼する。

オーム、マン、イーシュヴァラの最上のアートマンに敬礼する。

オーム、ウン、内部のアートマンを本質とするヴィシュヌよ、敬礼する。

オーム、アン、アートマンを本質とするブラフマーよ、敬礼する。

6.3.11　現実的な（*sakala*）シヴァ、完全な（*niṣkala*）シヴァへの讃歌

オーム、シヴァ、あなたは現実的であり、また完全であり、シヴァを本質とするオーム字である。

５つの音節と７つのオーム字は、一切の神々を本質とする最上のものである。

特別なアートマンであり、非常な徳を持つシヴァの庇護処に

（意味不明、*silambarasosinana*[24]）遍満する者に、一切の世界の主に

一切の生類を繁栄させ、常に都に赴く。

シヴァのもとに滴と月は常に赴く、月の滴のような河は、

オーム、シヴァよ、一切のオーム字は「シヴァ」と呼ばれる。

３つのサンディヤー（夜明け、真昼、夕暮れ時）の際にこれを唱える者は、一切の毒から解放される。

6.3.12　ガンガーの門[25]

オーム、ガンガーの門に、河の有る巡礼地に、そしてガンジス河と海の合流点に、

その一切に関係する者は、特に３つの場所により地上を得る。

私は罪である、私は罪深き行為を行う者である。私は罪を本質とし、罪から生じた者である。

蓮華の眼を持つ者よ、外と内の穢れから私を守れ。

不浄なものも、浄なるものも、あるいはまた一切の欲望から来たものも

イーシャーナ（シヴァ）神を考えて、外も内も浄なるものとなる。

6.3.13　神への讃歌（*bhaṭṭārakastava*）

オーム。一切の苦しみを滅する太陽神に礼拝し、

食物と解脱と恩恵を与えてくれるアーディティヤ=シヴァのために礼拝すべきである。

6.3.14　ガンジス河やサラスヴァティー河などの名を唱えること

オーム、ガンガー、サラスヴァティー、シンドゥ、ヴィパーシャー、カウシキー河、偉大なヤムナー、最上の大河サラユー河よ。

---

[24] *silambarasosinana*に関してはLévi 1933, 23に見られるが、意味は不明である。なおこの箇所を含む6.3.11の記述はPuja 2007, Hooykaas 1966には見られない。

[25] この部分はPuja 2007, Hooykaas 1966には無い.

6.3.15　ガンガー・シンドゥ

オーム、徳高き、水をたたえ、大海を伴ったガンガー、シンドゥ、サラスヴァティー、ヤムナー、ゴーダーヴァリー、ナルマダー、カーヴェリー、サラユー、マヘーンドラタナヤー、チャルマンヴァティー、ヴェーヌカー、バドラー、ネートラヴァティー、マハースラナディー、クヤーター、そしてガンダキー河は、祝福をせよ。

6.3.16　ガンガー女神の大いなる徳[26]

オーム、ガンガー女神よ。偉大な福徳を持つ者よ、遍満する美しき者に敬礼する。

最高の女神ヤムナーよ、最上の徳を持つ者よ、あなたに礼拝する。

徳を持つ者、世間を満足させる、ナルマダー女神よ

偉大な女神よ、大地（*dharaṇī*）、穢れを払うもの、私はあなたに敬礼する。

あなたは神聖であり、神聖なものから生じた。シヴァ神を背にする者よ、あなたに敬礼する。

ニーランジャナーよ、世界の苦しみを払う者、あなたに私は敬礼する。

マンダーキニー女神よ、穢れを払う者よ、あなたに敬礼する。

偉大な女神ジャンブシャンカよ。女神は神の命にしたがって

ナーラーヤナ（ヴィシュヌ）に愛されるものよ、メール山を右繞し、苦しみを、

山の馬の顔を持つ徳高き者よ、子どもの苦しみを打ち砕け。

牛乳、サトウキビ、バター油、クシャラ草、ヤクシーのごとく汚れの無いものよ、

私たちを守れ、苦しみを滅する者、あなた方に私は敬礼する。

6.3.17　ガンガー女神への讃歌[27]

オーム、ガンガー女神よ、あなたに敬礼する。冷たい水にもまた、

---

[26] Puja 2007, 189では「6名のガンガー女神への讃歌」(stava-ṣaḍgaṅgā)、Hooykaas 1966, 94では「6名のガンガー女神」(ṣaḍgaṅgā) となっている.

[27] Hooykaas 1966：96に同様の韻文がある.

穢れなき水、スヴァヤンブー（シヴァ）の聖水の容器にある水は、
手から手に良い食べ物をもち、邪悪と病気を滅する者よ、
神聖な偉大なる聖水よ、[あなたは]ガンガーであり、また大海である。
オーム、金剛を手に持つ者よ、偉大なる聖水よ、罪と悲しみを滅する者よ、
河は花の住処であり、常住である。河よ、聖水よ、愛する者よ。
オーム、聖水たる河よ、水瓶であり、色を身体とするもの、偉大なムニたちの恩恵であり、また神（*divaukasa*）である。
オーム、一切の障碍を滅せ。一切の苦しみを滅せ。
一切の苦を滅するために、一切の罪を滅せ。

6.3.18　ガンガー・ソーマ（*gaṅgāsoma*）[28]

オーム、ガンガー女神は偉大な徳を持ち、またソーマは吉祥な甘露である。
シヴァの諸行為は吉祥なものであり、シヴァの水瓶は最上のものである。
オーム、ハラ（シヴァ）の巻き髪の徳は神聖であり、罪を滅するものである。
一切の障碍の滅が、三眼の者（シヴァ）の御力によってあり、
偉大な神であるブラフマーとヴィシュヌは、水であり、水を身体としている。
一切の甘露を与えよ、ガンガー女神よ、敬礼する。
聖水の智であり、偉大な聖水は海に広がる
ナーラーヤナなどは水ではないが、水瓶の水は偉大な河である。
ブラフマー、ヴィシュヌ、イーシュヴァラの三神は水を身体としている。
一切の甘露を私に与えよ、ガンガー女神よ、敬礼する。

6.3.19　水の成就（*jalasiddhi*）

オーム、水の成就に、偉大なシャクティ（女神）たちは、一切の成就に、シヴァの聖水は、
シヴァの甘露を、吉祥な、一切の解脱者栄えある女神たちは、

---

[28] この部分はPuja 2007, Hooykaas 1966には無い.

シヴァに敬礼する。ビンドゥ・ドゥヴァイェーシュヴァラよ、常に敬礼する。

主よ、あなたは力強く、大いに賞讃されるべきであり、一切の病気を滅する者である。

オーム、アン、忍耐を満たす者に敬礼する。オーム、ウン、パト、敬礼する。

6.3.20　ガンガーの賞讃

ガンガー女神よ、あなたに敬礼する。[あなたは]オーム字と呼ばれる。[あなたは]一切の障碍を滅する。また一切の病気を滅する。

6.3.21　聖水に香りの良い花、蓮華、白い花を落とすこと[29]

オーム、オーム、イ、カ、サ、マ、ラ、ラ、ヤ、ウン、スヴァーハー。オーム、アル、カ、サ、ヤ、オーム、敬礼する、スヴァーハー。オーム、オーム、輝かしい蓮華に、私のジーヴァ（魂）と身体を守れ[30]。

6.3.22　長寿[の祈願文]

オーム、長寿と力と繁栄とエネルギーをもたらす者、ムリトゥユンジャ（死に打ち勝つ者）、永遠なる者、

病気などの［人を］衰退［させるもの］、ハンセン氏病、危険、穢れであり、月の光を放つ者、

フリンのマントラであり、四臂三眼であり、蛇の聖紐を身にまとうシヴァ、

色が白く、甘露の中心に赴いた者、幸福を為し、生命の消滅（死）を払う者、

白い蓮華の果皮に住し、神々とアスラたちに礼拝され、

死と怒りを力とし、偉大な姿[31]からなり、樟脳の花粉の輝きを持つ者、

心臓にいる[32]あなたに私は敬礼する。偉大な賞讃により信愛の庇護処

---

[29] Puja（2007, 192）はこの箇所を*mṛtyuñjayastawa*と呼んでいる。

[30] Hooykaas 1966, 118-119の読みと英訳を参照した。

[31] Lévi 1933, 16では*mahākṛta*となっているが、Hooykaas 1966, 98の*mahākṛti*を採る.

を得て、

寂静であり、世界に遍満し、永遠なる者、一切の本性であり、完全なる者、

信仰と信愛を持つ者に解脱をもたらし、遍満せる者、世界を保持する者、

冠と耳飾りを身に着け、悪霊を破壊する者、

死に打ち勝つ者に礼拝する。ハリ（ヴィシュヌ）のマントラを常に唱え、

あなたは解脱者であり、あなたは世界であり[33]、常に三昧に入っており、悪霊を破壊する。

6.3.23　ムリティユンジャ（シヴァ）への敬礼

ムリティユンジャの名前をここにおいて唱える者は、

長寿を得て、戦いにおいて勝利を得る。

オーム、アートマンよ、真実のアートマンよ、私を浄めよ、スヴァーハー。オーム、最初に浄化された者は、第二に浄化された者は、第三に浄化された者は、第四に浄化された者は、水よ、清浄であれ、清浄であれ。

オーム、長寿という利益、名声という利益、成功という利益、智恵と幸福と栄光[という利益]、

そしてダルマの継続という利益、これら７つの利益があなたにあるように。

メール山に神々が住し、ガンガーが地上を流れ、

月と太陽が天空にある限り、勝利があるだろう。

オーム、長寿があれ、そのようであれ。オーム、障碍なくあれ、そのようであれ。

吉祥があれ、そのようであれ。オーム、幸福があれ。オーム、豊かさがあれ、そのようであれ。オーム、恵みがあれ。７つの利益があれ、そのようであれ、そのようであれ、スヴァーハー。

---

[32] Hooykaas 1966, 98では*varadāya*, Puja 1966, 193では*aradāya*となっているが、Lévi 1933, 16の*hṛdaye*を採用した.

[33] Hooykaas 1966, 98 *jagat tvaṃ*にしたがった。

6.3.24　供養、聖水、賞讃[34]

オーム、一切の力を持つ者、大地、神の子であるブラフマー、ヴィシュヌ、マヘ―シュヴァラは、常に一切であれ。ヤ、敬礼する、スヴァーハー。オーム、サン、常に衆生にとって、穢れを浄化する者、病気を浄化する者であり、罰と罪を浄化する者、障碍を浄化する、浄化された者、一切の過ち、穢れ、罰を浄化する者よ、ウパタ。 オーム、ヴァーユの子よ、あなたに敬礼する、スヴァーハー。

6.3.25　一切の贖罪のマントラ（*sarvaprāyaścittamantra*）

オーム、師よ、成就よ、スローン、サラシャト。オーム、一切の障碍に敬礼する。一切の苦、病気、一切の敵、一切の罪を滅する者に敬礼する、スヴァーハー。

7　灰を身につけること、およびシヴァ神の瞑想と供養

7.1　身体に灰を付けること

7.1.1　灰の準備

オーム、この灰は最上の秘密であり、一切の罪を滅し、
一切の病気を鎮め、一切の罪を滅する。

7.1.2　灰を手にとること

オーム、ヴァーマデーヴァよ、秘密なるものに敬礼する。

7.1.3　灰を粉にすること

オーム、ブール、ブヴァハ、スヴァハ。

7.1.4　灰を身体各部に塗ること

オーム、イーシャーナに敬礼する（頭）。オーム、タトプルシャに敬礼する（額）。オーム、アゴーラに敬礼する（のどぼとけ）。オーム、ヴァーマデーヴァに敬礼する（右肩）。オーム、サーディヤに敬礼する（左肩）。

---

[34] この部分はHooykaas 1966, Puja 2007には無い.

[35] Hooykaas 1966, 160参照

オーム、アン、心臓に敬礼する（心臓）。オーム、レーン、アルカに、頭に敬礼する（頭）。オーム、ブール、ブヴァハ、スヴァハ、敬礼する（髪[35]）。オーム、フルン、鎧（kavaca）に敬礼する（喉）。オーム、フン、パト、武器に敬礼する（耳）。

7.2　シヴァ神の瞑想と供養

7.2.1　瞑想の準備

7.2.1.1　シヴァ神の足元に合掌すること

オーム、フラン、フリン、サハ、パラマシヴァ=アーディティヤに敬礼する。

7.2.1.2　聖水の容器に*śirowista*（ヘアバンド）を付けること[36]

*śirowista*は大いに神聖であり、清浄であり、罪を滅するものである。

常にクシャ草の先端のごとく鋭く坐す。そのような［*śirowista*を］受け取れ。

7.2.1.3　統合すること

オーム、シヴァの姿をしたものに敬礼する。

7.2.1.4　３つの本質の布置　本稿5.6.2と同様

7.2.1.5　シャクティおよびトリムールティへの敬礼[37]

オーム、アン、デーヴァシャクティに敬礼する。オーム、ウン、ヴィシュヌ・ビンバシャクティに敬礼する。オーム、マン、トリシャクティに敬礼する。オーム、アン、ブラフマーに敬礼する。オーム、ウン、ヴィシュヌに敬礼する。オーム、マン、イーシュヴァラに敬礼する。

オーム、ブータ・ナータ・パティ（シヴァ）に敬礼する。オーム、ブー

---

[36] 山口 2021, 115, 3.7.1の箇所と同様のマントラである。

[37] Puja 2007, 247, l.-1では、この箇所は*śivīkaraṇa*の行為とされ、その目的は行為者の身体の浄化である。またここでシャクティのマントラが使用されるのは、身体各部に神格（ここではシヴァと考えられる）の精髄を顕現させるためとされている。

タの慰撫に敬礼する。オーム、ブータの読誦に敬礼する。

7.2.1.6　シヴァ神の供養

オーム、ヴォーン、シヴァ神に敬礼する。オーム、フン、サダーシヴァに敬礼する(へそ)。オーム、ホーン、シューニヤ・シヴァに敬礼する(頭)。オーム、パト、ビンドゥ・デーヴァに敬礼する（心臓)。

7.2.1.7　四本の指に「手を浄化する秘密（*karaśuddhirahasya*)」を布置すること

オーム、サン、敬礼する（人差し指)。オーム、アン、敬礼する（中指)。オーム、カン、敬礼する（薬指)。オーム、ウン、ラハ、パト、武器に敬礼する（小指)。

7.2.2　シヴァ神の瞑想

7.2.2.1　準備が整った後、祭壇に水をまき散らすこと

幸いあれ。

7.2.2.2　調息

オーム、アン、敬礼する。オーム、アン、ブラフマーに敬礼する。オーム、ウン、敬礼する。オーム、ウン、ヴィシュヌに敬礼する。オーム、マン、敬礼する。オーム、マン、イーシュヴァラに敬礼する。オーム、マン、敬礼する。

7.2.2.3　印を伴ったすべての供物による供養

7.2.2.4　シヴァ・アーディティヤ神を祭壇まで招くこと

オーム、オーム、パラマシヴァ・スーリヤに敬礼する。オーム、オーム、サダーシヴァ・スーリヤに敬礼する。オーム、オーム、サダールドラ・スーリヤに敬礼する。オーム、オーム、マハーデーヴァ・スーリヤに敬礼する。オーム、マン、イーシュヴァラ・スーリヤに敬礼する。オーム、ウン、ヴィシュヌ・スーリヤに敬礼する。オーム、オーム、ブラフマ・スーリヤに敬礼する。

7.2.2.5　アナンタの座および蓮華座を作ること

本稿5.6.6, 5.6.7と同様のマントラ。

7.2.2.6　祭壇にシヴァ神を生じさせること

オーム、マン、敬礼する。オーム、ウン、敬礼する。オーム、アン、敬礼する。

7.2.2.7　［招いた神を］留め置くこと

オーム、アン、ウン、マン、敬礼する。

7.2.2.8　神の安立（*devapratiṣṭhā*）

オーム、オーム、神の安立に、敬礼する。

7.2.2.9　最高のマントラ（*kūṭamantra*）

オーム、フラン、フリン、サハ、パラマシヴァ=アーディティヤに敬礼する。

7.2.2.10　マントラを唱えて神を目覚めさせること

オーム字で始まる、恐ろしき者、秘密であり、シャクティに興奮する者、
灯明は、すべての供養の一切の成就を為す甘露である。
敬礼する、スヴァーハー。

オーム、ウン、ウーン、マン、ウン、アン、グマン、アン、ウン、アン、ウン、ウーン、オーム、敬礼する、スヴァーハー。

ナン字で始まり、ナン字により話されるルドラに
病気を払い、一切のマントラの成就を与えるマントラに
オーム、敬礼する。

オーム、ナン、ウン、ナン、グマン、ナン、ウン、ナン、オーム、敬礼する、スヴァーハー。

オーム、オーム字から始まり、アン字で言われるルドラに
このマントラの教えは最高であると言われる。
敬礼する、スヴァーハー。

オーム、ウン、ウーン、グマン、フン、フーン、オーム、敬礼する、

スヴァーハー。オーム、グリン、神への礼拝に、敬礼する、スヴァーハー。

7.2.2.11　一切の供物による供養

7.2.2.12　僧の身体をシヴァにすること[38]（*śivīkaraṇa*）

オーム、イン、イーシャーナに敬礼する。オーム、タン、タトプルシャに敬礼する。オーム、アン、アゴーラに敬礼する。オーム、ヴァン、ヴァーマデーヴァに敬礼する。オーム、サン、サーディヤに敬礼する。オーム、アン、心臓に敬礼する。オーム、レーン、身体と頭頂に敬礼する。オーム、ブール。ブヴァハ、スヴァハ。燃えている頭部に敬礼する。オーム、フラン、鎧に敬礼する。オーム、バン、眼に敬礼する。オーム、ウン、ラハ、パト、武器に敬礼する。

7.2.2.13　一切の供物による供養

7.2.2.14　生起のための十種子のマントラ

イ、バ、サ、タ、ア、ヤ、ナ、マ、シ、ヴァ、マン、ウン、アン。

7.2.2.15　神の安立

オーム、オーム、神の安立に敬礼する。

7.2.2.16　維持のマントラ

サ、バ、タ、ア、ヤ、ナ、マ、シ、ヴァ、ヤ、アン、ウン、マン。

7.2.2.17　掌から水を献じること（*udakāñjali*）

オーム、アン、カン、カソールカ（=イーシャーナ）に、グリン、許しを与える者に敬礼する。

7.3　結びの供養

---

[38] ここでの*śivīkarṇa*は5種のシヴァを僧の身体各部に布置する行為であると思われる。

7.3.1　洗足水、口漱水をささげること

5. 6. 10. 1と同様のマントラ

7.3.2　合掌すること

オーム、太陽の最上の光よ、赤い光を持つ者、あなたに敬礼する。

オーム、白い蓮華の中央に坐す太陽、あなたに敬礼する。

7.3.3　水による慰撫[39]（*toyatarpaṇa*）

オーム、オーム、スーリヤよ、来い。光よ、世間主よ、

慈悲により、信愛により、秘密である者、太陽よ、

敬礼する、あなたに敬礼する。

7.3.4　水を捧げて神を慰撫すること（*tarpaṇatoya*）

5.6.8.7、5.6.8.8と同様

7.3.5　太陽神への讃歌[40]

オーム、堅固なるメール山に取り囲まれた一切世間を、

太陽と月のような至高の神々、活力を作り出す者に、

ジャンブ州の非常に巨大な虚空に、一切［を見る］眼を持つ者に敬礼する。

水滴の庇護処に敬礼する。あなたに敬礼する。

最上の太陽神シヴァの神々しい姿よ、

光であり、海に守られた主よ、主よ、

地上の七つの世間界を[見通す]三眼を持つ者に、

神々の庇護処であるアーディティヤ神に、あなたに敬礼する。

カーラに、太陽よ、バースカラよ、力強い神よ、

信愛により作られた姿で営まれる美しい家[に住むもの]に、

宝石に、宝石と宝珠で飾られた者に、

三界の主の庇護処に敬礼する。

---

[39] Hooykaas 1966, 108-109参照

[40] Hooykaas 1966, 112に同様の文言がある。

7.3.6　一切の供物による供養（*sankepi*）　（以上）

参考文献

山口しのぶ 2020「バリ・ヒンドゥー教のバユ・オトン儀礼について」『東洋思想文化』7：86(61)- 65(82).

山口しのぶ 2021「バリ・ヒンドゥー教のサンスクリット儀軌*Wedaprikrama*―儀軌の概要および部分訳」『東洋思想文化』8：132(91)-112(111).

Gonda, J. 1973 *Sanskrit in Indonesia*. Śatapitaka Series, Indo-Asian Literature, Vol. 99, International Academy of Indian Culture and Aditya Prakasha, New Dehli.

Hooykaas, C. 1966 *Sūrya-Sevana*, The Way to God of a Balinese Śiva Priest. N.V. Noord-Hollandsche Uitgevers Maatshappij, Amsterdam.

Lévi, Sylvain 1933 *Sanskrit Texts from Bāli*. G.O.S No. 67, Gaekwad Oriental Institute, Baroda.

Puja, G. 2007 *Wedaparikrama Satu Himpunan Naskah Mantra dan Stotra Teks Asli Bahasa Sansekerta dan Penjelasannya*. Paramita, Surabaya.

Yamaguchi, Shinobu 2022 “Character of Balinese Hindu Sanskrit Text：Vedaparikrama,” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 70-3, 1063-1070.

【謝辞】本研究はJSPS科学研究費補助金（科研費）19K00064の助成を受けたものです.

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP 19K00064.